

洞察学習における社会的促進の検討

○坂本和久・押江隆

(山口大学教育学部)

目的

他者の存在が個人の行動を促進することを社会的促進といい、池上・遠藤(1998)によれば、傍らに他者が単に存在するだけでも生起する。また、突然はつきりとそれが正しい答えであると強く確信されるものを洞察といい、ポジティブな感情を伴う現象で、このような主観的体験をアハ体験と呼ぶ。アハ体験を生じる刺激としてモーフィング動画が挙げられる(石川・戸嶋・ガルクピス・茂木・神門, 2013)。これまでの社会的促進の研究において洞察学習を課題として用いたものはみられない。そこで本研究では、モーフィング動画を用いて社会的促進が洞察に対してどのような影響を与えるかについて検討することを目的とする。

方法

実験参加者 大学生 20名(男性9名, 女性11名)が実験に参加した。年齢の平均は19.65歳(SD=2.18歳)であった。

刺激 動画は石川ら(2013)を参考にPowerPoint 2013とWindowsムービーメーカー2012を用いて動画の作成と選別を行い、34本の動画を用意した。

手続き 実験が同じ部屋にいる状態を同室条件、違う部屋にいる状態を別室条件とし、「同室条件であれば、社会的促進が生起するため解答時間は別室条件より同室条件の方が短くなるであろう」という仮説を検証する。動画はPowerPoint 2013を用いてプロジェクターで動画を呈示した。実験参加者は動画を見て、映っているものが何か分かったら動画を止めて解答してもらった。この時、動画が再生され、実験参加者が動画を止めるまでの時間を解答時間とし、解答時間の平均と回答の正誤を分析対象とした。実験条件は実験の前半と後

半で一旦実験を中断し、条件を変更した。

結果

実験条件(同室・別室)×実験の順序(前半・後半)の2要因混合分散分析を行ったところ、実験の順序にのみ有意な主効果がみられた($F(1, 18)=11.02, p<.01$)。条件ごとの平均解答時間と標準偏差をTable1に示す。

考察

分散分析の結果より条件による違いでは有意な差が見られず、実験の順序では有意な差が見られた。さらに、実験順序の平均値を見ると実験条件にかかわらず、前半より後半の平均解答時間が短くなっている。これは、試行の繰り返しによる練習効果があったからだと考えられる。この結果は、別室条件より同室条件の方が解答時間は短いという仮説を棄却するものであった。Zajonc(1965)によれば、十分に学習された反応は、観察者のいるところで促進されるのに対し、新しい反応の獲得は、逆に妨害される。つまり、仮説通りに社会的促進が生起されなかったのは本課題が実験参加者にとって十分に学習されたものではなかったからと考えられる。一方で、条件の違いで解答時間が長くなることもなかった。これは、実験者が実験参加者と同じ部屋にいただけで介入しなかったために、実験参加者は別室条件と同様に学習に集中できたためと考えられる。

今後の課題として、実験が終わった後に、「人がいた方が緊張した」という内省報告があった。このことから、実験参加者ごとの不安の感じやすさの違いが解答時間にも影響を与えていた可能性があると考えられる。さらに、「人がいると観察されているような感じがした」という内省報告も得られた。池上・遠藤(2008)によれば、Latané(1981)は間近に観察される方が、ビデオカメラを通じて別室から観察されるより、インパクトが強くなると述べている。よって、今後の研究では観察されている状況下で解答時間が短くなるかどうかを検討する必要があるだろう。

Table 1 条件ごとの平均解答時間と標準偏差

実験条件	実験順序	N	平均	SD
同室→別室	前半	10	18.27	2.91
	後半	10	16.02	4.20
別室→同室	前半	10	20.01	4.73
	後半	10	18.59	3.80